2022年2月27日（日）主日朝礼拝説教

『冷たくもなく、熱くもない』井上隆晶牧師
ヨハネ黙示録 3章7〜8、14〜20節、マルコ福音書1章12〜15節

❶【黙示録とは何か？】

ヨハネの黙示録は紀元 90 年代にローマのドミティアヌス皇帝の迫害下のもとで書かれました。迫害というと60年代のネロ皇帝のものが有名です（この時ペトロは殉教する）が、それは宗教的な迫害ではなく、期間も短く、場所も限定されていました。しかしドミティアヌス皇帝の迫害はとても激しく、年数も長く、キリスト教に対する迫害であって皇帝礼拝を強要されました。著者はヨハネという人物ですが、十二弟子のヨハネではなく、エフェソ教会の長老ヨハネか、別のヨハネだと言われています。彼はアジア州にある7つの教会に宛ててこの預言書を書きました。アジア州というのは今のトルコに当たります。当時この地方には他にもいくつかの教会がありましたが、なぜこの七つの教会が選ばれたのか明らかではありません。たぶん彼が監督していた教会だったのだと思います。「**黙示**」というのは「**覆いが除かれて明らかにされる**」という意味です。数字（7、14万4千とか）や幻や象徴的な動物（いなご、竜、大淫婦、獣）を用いて、反キリストや皇帝や迫害者たちを表現し、苦難や迫害があっても、悪は必ず裁かれ最後には善が勝つので希望をもって今を生きるように励ますことに目的があります。黙示録は解釈が難しく、間違って読むと大変なことになります、例えば16章に「ハルマゲドン」という言葉が出てきますが、これを世界最終戦争だと思い込んだカルト宗教や偽預言者たちがいます。「ハル」とはヘブライ語で「丘」という意味で「マゲドン」は「メギド」という地名です。ガリラヤ湖から西へ向かう所にあります。そんなわけで東方教会では最後までなかなか正典に入れられませんでした。

❷【冷たいか熱いか、どちらかであってほしい】

今日はフィラデルフィアとラオディキアの二つ教会のから学びたいと思います。この二つの教会は現在のトルコ内陸部にありました。7節の「**聖なる方、真実な方、ダビデの鍵を持つ方**」とはキリストの事です。1章18節では「**死と陰府の鍵を持っている**」とありますが、ここではダビデの鍵と言われています。昔王になると宝物庫の鍵を与えられました。それと同じで、キリストは天国の王なので、天の宝物庫の鍵を持っており、人に天の朽ちない宝を与えることが出来る方であり、また人を死の牢獄から釈放する鍵も持っておられる方だというのです。「**わたしは、あなたの行いを知っている。見よ。わたしはあなたの前に門を開いておいた。だれもこれを閉めることはできない。あなたは力が弱かったが、わたしの言葉を守り、わたしの名を知らないと言わなかった。**」（8節）この教会は小さい教会だったのですが、迫害されてもキリストを告白したという事でしょう。キリストはフィラデルフィアの教会に、誰も閉じることのできない天国の門を開いておいて下さ

いました。フィラデルフィアの教会は何一つ責められていません。
一方ラオディキアの教会は「**わたしは金持ちだ。満ち足りている。何一つ必要な物はない**」とありますから豊かな教会だったことが分かります。しかしラオディキアの教会に対しては「**あなたは、冷たくもなく熱くもない。むしろ、冷たいか熱いか、どちらかであってほしい。熱くも冷たくもなく、なまぬるいので、わたしはあなたを口から吐き出そうとしている。**」（15～16 節）とかなり厳しい叱責の言葉を言われました。この教会は目に見える所は大きく豊かだったのですが、キリストの目には惨めで、貧しく、何も見えていない教会に見えていたのです。ここに神の目が見ておられることと、人間の目が追い求めているものの違いを見ることが出来ます。神が見ているのはその人が神の言葉を守ったかどうか、どれだけ神の言葉に望みを置いて生きたかです。
「**熱いか、冷たいかどちらかであってほしい**」とあります。熱いというのは熱心な状態のことです。冷たいとは、キリスト教を何も知らない状態のことです。「**なまぬるい**」のが駄目なのですから、熱心だったら良いのでしょうか？カルト宗教も異端者たちも実に熱心です。夜遅くまで伝道し、珍味を売り、路傍で声をかけ、多額の献金をします。ですから「**なまぬるい**」には別の意味があると思います。

●榎本保郎牧師はこんなことを書いています。「黙示録というのは、迫害に悩み苦しんでいる者たちに送られたものである。考えてみると、迫害は受動的なものではない。迫害というものはキリスト教信仰をしているから受けるというものではない。迫害は自分が選びとってゆくものである。だから能動的なものである。イエスに弟子たちは逃げようと言ったが、イエスは私がいま逃げたのでは、聖書に書かれている言葉が成就しないと言われた。自分の生死よりも、聖書に書かれてあることの証しのほうが大切であるとして、みずから進んで十字架を選び取っていかれたのである。」ただ信仰をもっているだけでは迫害されないのです。逃げればいいし、誤魔化せばいいのです。踏み絵を踏めばいいのです。神の言葉に忠実に生きようとする者が迫害されるのです。

第二次世界大戦の時、日本基督教団は戦争に協力し、戦闘機を献上しました。悪と妥協し、軍部に仕える教会になったのです。そうすれば迫害されず、生き残ることができたからです。しかしホーリネス系の牧師たちは天皇に頭を下げず、戦争に反対しましたから弾圧され、投獄され、何人かは獄死し、教会は解散させられました。迫害は自分が選びとってゆくものです。ロシアがウクライナに侵攻しました。この世は何でも起こると思いました。もしどこかの国が攻めてきたらどうします？武器を取って戦いますか？日本を守るためにやはり軍隊が必要だということになるでしょう。しかしイエス様は徹底的に、奪われるままでいなさい、迫害されても祈りなさい、抵抗するなと言われました。この言葉を本気で実践しようと思うなら「**この世」というものを捨てる覚悟をしなければなりません。この世で生きながらえよう、この世で幸せになろうと思ったら、神の言葉は守れないのです。つまり、フィラデルフィアの教会は天を見上げて信仰していた教会で**

あり、ラオディキアの教会は地のことを思って信仰していた教会だという事だと思います。信仰にも二種類あるのです。天を目指す信仰と、地を目指す信仰です。カルトは熱心ですがすべて地上の物を手に入れるために信仰しています。地上で豊かになり、政治家と仲良くして妥協し、迫害から逃れ、長く生き残ることを考える信仰を「**なまぬるい信仰**」というのです。天を目指して生きようとしない信仰を「**なまぬるい信仰**」というのだと思います。「**私たちの本国は天にあります**」（フィリピ３：20）天のものを求めましょう。

❸【神はいつも共にいてくださる】

「わたしは愛する者を皆、叱ったり、鍛えたりする。だから熱心に努めよ。悔い改めよ。見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう。」（19～20 節）

キリストは外に立って、戸を叩いています。ラオディキアの教会は、キリストを外に追い出してしまったという事です。キリストのいない教会とは一体、何を礼拝しているのでしょう。それは人間がした事とこの世の物を礼拝しているのです。フィラデルフィアの教会は天国の門が開いていたので天の香りがしたことでしょう。一方ラオディキアの教会は地の匂い、人間の匂いしかしない教会だったと思います。教会はキリストの香り、天の香りがする所でなければなりません。それでも、キリストはラオディキアの教会を見捨てず戸を叩き続けています。キリストは無理に扉を開けて入ることはしません。なぜなら扉のノブは内側にしかついていないからです。人間が心の扉を開いてキリストを受け入れるのを待っておられるのです。救いというのは神の恵みと人間の自由意志の協働だからです。

●上智大学神学部教授の武田なほみ先生は「成人発達心理学」をされていて、こんなことを書いています。「人間の成長や発達を考える時、何かが出来るようになってゆくプロセスは人間にとってとても大切です。しかし実はそれで人間の発達は終わらないということなのかも知れません。…私は現在、認知症の母の面倒を見ています。そして、会う度に何度も同じ話を繰り返すのです。母は音楽家でしたが、不思議なことに音楽の道に進んだ後の活動の話は全く出てこないのです。そうではなくて、幼い頃に音大に行くきっかけになった話を繰り返す。人間って認知症になっても思い出すのは、人生の何十年間も費やしてきた〈活動〉の話ではなく、私が大切な存在として見られているという眼差しを受けた体験なのだと思っています。」

つまり、自分がしたことではなく、神様や人にしてもらったこと、愛されたことだけが残るということです。

教会のＭちゃんは重度の障がい児です。朝の祈りの時に母親のＫさんが「一生歩けなくていいの、一生しゃべれなくていいの、と聞くと、〝いいよ〟と言ってくれました」と祈られ、涙が出ました。この子は何も出来ませんが、良く笑います。

多くの物を貰いませんでしたが喜んでいます。他の子が遊んでもらっているのを見ても笑っています。自分が愛されていることを分かっているのだと思います。神に愛されない人は誰もいないのです。そのあまりにも大きな愛を知った人は幸せです。最後は愛された思い出だけしか残らないのですから。
2 世紀のスミルナの教会の教父ポリュカルポスを思い出しますね。彼はキリストを捨てよと言われた時、「私は 86 年間キリストに仕えてきましたが、彼は決して私に対して悪いことをしませんでした。どうして、私を救ってくださった私の主を冒涜することができましょうか。人は悪から善に向かうのは良いことですが、善から悪に戻るのは良くないことです。」といって殉教してゆきました。愛された人のことは裏切りません。どうかこの受難節の時、また一歩、神とキリストの愛を知る者となりますように祈ります。